絶対支配者と暗殺神、虚圏に光臨。

小狗丸

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

作者が書いているオーバーロードの二次小説「とある至高の四十一人の日記」のオリ主とナザリック勢（＋α）がＢＬＥＡＣＨの世界に転移する話です。

この話ではオーバーロードのキャラが圧倒的に強い設定となっています。

目　次

二回目の異世界転生 ―― 1
慎重に進む蜘蛛 ―― 4
藍染惣右介という死神 ―― 7

二回目の異世界転生

皆は「異世界転生」という言葉に聞き覚えがあるだろうか？

ある日、普通に暮らしていた人間が何らかの原因で常識が異なる異世界や、漫画やゲームの世界に生まれ変わったり転移したりする物語の総称だ。

主人公が転生した時に得た特別な能力や前世の知識を上手く使って異世界で活躍をするこの手の話は、俺が生まれる前から多くの読者に支持されていた。

では「異世界転生が現実に起こると思うか？」と聞かれたら皆はどう思う？

まず間違いなく、ほとんどの人は「そんな夢みたいなこと起こるはずないだろ」と一笑するだろう。だけど俺は起こると思うね。

……だって俺、今実際に異世界転生しちゃってるもの。

しかも俺、これが初めての異世界転生じゃなくて二回目なんだぜ？

元々俺は趣味が漫画とゲームっていう普通の会社員だったんだ。

それがある日、十年以上遊んでいたＤＭＭＯ―ＲＰＧ「ユグドラシル」のサービス終了日にオンラインすると、ゲームで使っていたキャラクターとなってユグドラシルに似た異世界に転移していたのだ。

これが一回目の異世界転生。

転移した俺は異世界をあても無く歩き回り、途中で一人の仲間と出会い、そしてようやくユグドラシル時代の拠点である「ナザリック地下大墳墓」に辿り着き、俺と同じように異世界に転移した友人と再会できたと思ったら今回の二回目の異世界転生だ。

二回目の異世界転生は仲間が開いてくれた俺の帰還を祝うパーティーの最中に起こって、拠点ごと一緒に転移した先は見渡す限り砂漠の夜の世界。何故夜の世界と言ったかというと、この世界に来てもう三日も経つのに夜が明けないからだ。

一体この世界はどこなんだろう……っと。

「ああ、ここにいたんですか。『クモエル』さん」

外で夜風にあたりながらこれからどうするか考えていると聞き覚

えのある声が俺の名前を呼んだ。「クモエル」というのは俺のこの体の名前だ。もちろん本当の名前は別にあるのだが、元の世界に帰れて元の姿に戻れる保証はどこにもないので、元の姿に戻れるまではこの名前を名乗っていくつもりだ。

そして俺の名前を呼んだのは、左手に禍々しいオーラを放つ金色の杖を持ち、漆黒のローブで身を包んだ骸骨だった。……うん。いつ見てもやっぱり悪役のような姿だ。昔のＲＰＧだったら充分ラスボスに配役されるだろう。（褒め言葉）

この全身から魔王のような雰囲気を感じさせる骸骨こそが俺と同じ世界で生まれた仲間で、彼はゲームのユグドラシルでは俺が所属していたギルド「アインズ・ウール・ゴウン」のギルド長を務めていた。その事もあって、話してみると気さくないい人なのだが、いざという時になると凄まじい機転のよさと決断力を見せる頼れる友人だ。

「どうしたんですか、『アインズ』さん？」

俺は魔王のような骸骨の友人の名前を呼んだ。彼はユグドラシル時代の時は「モモンガ」という名前だったのだが、最初の異世界転生を体験した時にある理由から「モモンガ」という名前を捨てて、俺達のギルド名である「アインズ・ウール・ゴウン」を名乗るようになったのだ。

「ええ。実はさっき探索用のマジックアイテムで周囲を探索していたら、なんと三人の人間がこのナザリック地下大墳墓に向かってきている姿を見つけたんですよ」

「……！　それは本当ですか？」

どことなく興奮した様子で話すアインズさんの言葉に俺は思わず驚いた。

こんな見渡す限り砂漠の、生物が生きていけそうもない世界に人間が三人も？　しかもこのナザリック地下大墳墓に向かってきているって？

「ここがどんな世界なのか知っているかもですし、これから部下をつれてその人間達に会いに行こうと思っているんですけど、クモエルさんはどうします？」

「……そうですね。俺も一緒に行きますよ」
確かにこの世界の事を知るには現地の者達と接触を行うのが一番の得策だろう。そう思ったから俺もアインズさんに同行することに決めたのだが……。
……何故だろう？　少し、嫌な予感がする。

慎重に進む蜘蛛

この砂漠の世界に人間が三人いるという報告を聞いた俺とアインズさんは、それからしばらくした後、ナザリック地下大墳墓にいたシモベを連れてその人間達の元に向かうことにした。

シモベというのはユグドラシル時代に俺とアインズさん、そして今はもう会えないギルドの仲間達がナザリック地下大墳墓と創造した防衛用ＮＰＣのことだ。彼らは最初の異世界転生の時に自分の意思を持った存在となると、俺とアインズのことを神のように見て絶対の忠誠を誓ってくれている。

ナザリック地下大墳墓のシモベ達は非常に強くて優秀なのだが、たまに彼らの忠誠が重すぎるように感じるんだよな……。

まあ、それはともかく、発見した人間達の元に向かうメンバーはまずアインズさんと俺。次にナザリック地下大墳墓のシモベ達を統括している翼を生やした美女の姿をしたシモベのアルベド、アインズさんの執事をしている老紳士の姿をしたシモベのセバス。後はアインズさんが魔法で作り出した十数体のアンデッドモンスターだ。

『……あの、クモエルさん？』

砂漠を進んでいるとアインズさんが念話で話しかけてきた。

『何ですか、アインズさん？』

『何でクモエルさんは隠密スキルで姿を消しているんですか？』

そう、アインズさんが言う通り、俺は今ユグドラシル時代に獲得した隠密スキルを使って姿を消していた。他にも姿を消す以外の隠密スキルをいくつか使って足跡や足音にＭＰなどの様々な情報を隠蔽していて、アインズさん達もあらかじめ俺が付いてきていると知っていなければ気づかないと言ってくれた。

『……何となく嫌な予感がしたから念のためですよ。それにユグドラシル時代、こういう場面ではいつも姿を消していたでしょう？』

『こういう場面？』

念話で聞こえるアインズさんの声だけで彼が内心で首を傾げているの分かる。……やっぱりアインズさんってば人間達を見つけた嬉

しさで浮かれているな。この人、たまにこういうところが出でくるんだよな。
『……初対面の人達と交渉とかをしていた時ですよ。ユグドラシル時代、今みたいに俺達に近づいてきたのは半々の確率で騙し討ち目的の敵だったでしょう？』
『あっ……！』
ここまで念話で伝えたところで、ようやくアインズさんも俺が言いたいことを理解してくれたようだ。
ユグドラシル時代に俺とアインズさんが所属していたギルド「アインズ・ウール・ゴウン」は色んな意味で有名なギルドだった。
アインズ・ウール・ゴウンはアバターが所謂怪物の「異形種」であるメンバーのみで構成されていて、更には主な活動内容の一つが「異形種を対象にＰＫ行為をするプレイヤーに逆にＰＫ行為をするＰＫＫ行為」であることから、多くのプレイヤーから恨まれていたのだ。
だから異形種プレイヤーを差別するプレイヤー達がパーティーやギルドでアインズ・ウール・ゴウンに戦いを挑んでくることなんてよくあることで、敵対するプレイヤー達の中には表面上は友好的に振る舞ってこちらを罠にはめようとする奴だっていた。
罠にはめようとする奴らは大体、同盟の話や大規模なクエストを協同で攻略しようといった話を持ちかけてきて、それらの交渉をするためにこちらが出てきたところで襲いかかってくるのだ。今までそんな奇襲を受けたのは十回や二十回どころの話ではない。
俺はアインズさんがそういうキナ臭い交渉に向かうときは隠密スキルで姿を隠して彼の護衛についていて、そんな俺の勘が「これから会おうとする人間は怪しい」と警告を出しているからこそ、俺は隠密スキルを使ってこっそりとアインズさん達についているのだった。
『そうだった……。これから会う人間達がＰＫのような騙し討ちをしてくる可能性もあったんだ。……すみませんクモエルさん。どうやら俺は少し浮かれていたみたいです』
『気にしないでくださいよ。アインズさんが表に立ってそれを俺が裏で支える。いつものことじゃないですか？』

念話で謝罪をするアインズさんに俺はわざとおどけて答える。
俺とアインズさんは十年以上前にユグドラシルを始めたばかりの頃からの仲間で、今までどんな戦いもこのコンビで勝ってきた。だからここがどんな異世界で、どの様な敵がいても彼と一緒ならまあ、なんとか大丈夫だろう。
『……はは、それもそうですね。では行こうか、我が盟友クモエルよ。丁度向こうもお出ましのようだからな』
アインズさんは念話で小さく笑うと、その直後に今の魔王のような姿にピッタリな威厳のある口調で話しかけてきて、彼の言う通り遠く離れた先には米粒のような三人の人間の姿があった。

藍染惣右介という死神

「初めまして、異世界からの来訪者達よ。私の名は藍染惣右介。そして後ろにいるのが私の部下の市丸ギンと東仙要だ」

俺達がこの世界で発見した三人の人間達に接触をすると、藍染と名乗る三人の人間達のリーダーらしき男が最初に挨拶をしてきた。

三人の人間達は全員、黒の着物の上に白の羽織、そして腰には一振りの刀という昔の侍のような格好をしていた。夜の砂漠に現れた三人の侍……微妙に違和感を覚える光景である。

藍染は自信に満ち溢れているが同時におおらかな印象で、一見すると信頼できそうなのだが、ユグドラシル時代に何十回のＰＫプレイヤーの奇襲や裏切りを体験してきた俺の勘が「コイツらは危険だ」と警鐘を鳴らしていた。

「私の名はアインズ・ウール・ゴウン。アインズ、と呼んでください。あと、ここにいるのは私の部下であるアルベドとセバスです。……それで何故私達が異世界から来たのだと分かったのですか？」

アインズさんが威厳がある口調で話しかけると藍染は口元に笑みを浮かべて答える。

「分かるさ。私達はこれでも『死神』でね。魂を見る目はあるつもりだ。そして貴方達の魂は死神と『虚』のどちらでもありどちらでもない、私も今まで見たことのない異質なものだ」

「死神？　虚？　それは一体何なのでしょうか？」

藍染はアインズさんの質問に簡潔に順序立てて答えてくれた。

まず藍染達は人間ではなく死神で、死神とは「ソウルソサエティ」という所謂「天国」にあたる世界で暮らす世界の魂の流れを司る存在らしい。

次に虚とは死んでソウルソサエティに行くことができなかった死者の魂が命ある者を襲う怪物となった、悪霊みたいな存在だそうだ。

そして俺達がいるこの世界は「虚圏」といって、人間達が暮らす現世とソウルソサエティを隔てる次元の狭間にある虚達が暮らす世界なんだとか。

虚と呼ばれる怪物のような悪霊と、それから現地の人間を守るべく戦う死神、か……。この世界も中々にファンタジーだな。
「なるほど……。お陰でこの世界のことが少し分かりましたよ、ありがとうございます。それにしても虚と今まで戦い続けてきたとは、藍染さん達死神とは素晴らしくお強い存在なのですね」
俺がこの世界について考えているとアインズさんが説明をしてくれた藍染に礼を言う。……あっ。何かアルベドが不満そうな顔をしている。
自分の意思を持つようになったアルベドはアインズさん第一主義だものな。多分「真の強者はアインズ様ただお一人だ」とか考えているのだろう。
「ふふっ、ありがとう。……しかし私達死神が虚と戦えるのは『コレ』の力が大きいんだ」
アインズさんの言葉に藍染は友好的な笑みを浮かべながら答えると自分の腰に差してある刀を軽く叩いた。
「その刀の力、ですか？」
「ああ。この刀は『斬魄刀』といってね、力がある死神が持つとその死神にあった特別な力が発現できるんだ。……そうだね。実際に見せてみよう」
藍染はそう言うと腰の刀、斬魄刀を抜いて俺達に見せる。相変わらず藍染は邪気を感じさせない笑みを浮かべているのだが、この時俺の中では警戒心が最大限まで上がっていた。……コイツ、何をする気だ？
「砕けろ『鏡花水月』」
キィイイン！
藍染が斬魄刀を抜いて呟いた瞬間、俺の頭の中で何かが何かを押し返す幻聴が鳴り響いた。クッ！　頭が痛い！　よく見るとアインズさんにアルベドとセバスも頭痛を堪えるかのように額を抑えていた。
「うう……。き、貴様、一体何をした……？」
「ほう……？　私の鏡花水月の力が通用しないとは……流石は異世界からの来訪者と言ったところか。うまくすれば新たな戦力を得られ

ると思ったのだが」
「……貴様！　この下等生物が！」
　額を抑えるアインズさんを興味深そうに見ながら言う藍染の言葉にアルベドが般若の表情になって武器を構える。しかし藍染達三人は余裕の表情を崩す事はなかった。
「どうやら君達三人には鏡花水月の力が効かないようだが……君達の部下はどうかな？」
「「ーーーーーーーーー！」」
　藍染が言った直後、アインズが作り出したアンデッドモンスター達が突然アインズさん達に襲いかかってきた。何だ？　どうしてアンデッドモンスターが自分達を作り出したアインズさんを攻撃するんだ？
『アインズさん？　一体どうなっているんですか？』
『わ、分かりません！　アンデッドモンスター達のコントロールが急に効かなくなって……！』
　俺が念話でアインズさんに聞くと焦った声の返答が返ってきた。
「私達はこれで失礼させてもらうよ。アインズ・ウール・ゴウン、異世界からの来訪者よ。また会おう」
　アインズさん達がアンデッドモンスターに襲われていると、藍染達は空間に開いた黒い穴に入っていく。ふざけるな、逃がすものかよ！
『待ってください、クモエルさん！　彼らにはまだ攻撃しないでください！』
　黒い穴に入っていく藍染達を攻撃しようとした俺だったが、それはアインズさんからの念話によって止められてしまう。
　アインズさんにが俺を止めた理由は大体想像がつく。俺は前もっていくつもの隠密スキルを使っていたため藍染達に存在が知られていないので、ここで下手に情報を漏らすのを避けるためとかそんなところだろう。
　結局アンデッドモンスター達はアルベドとセバスの二人によって全て倒されたが、その間に藍染達が入っていった空間に開いた黒い穴は完全に塞がってしまい、三人の死神の足取りは掴めなくなってし

まった。

……クソッ！　ふざけやがって。

あの死神……藍染惣右介とか言ったな。ツラはしっかりと覚えたからな、次に会った時は今日の借りを倍にして返してやる。